

十三妹にされた何玉鳳

——武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』における転倒した白話——

藤 原 崇 雅

一 先行論の整理と本稿の目的

武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』（以下『十三妹』と略す）は、一九六五年七月二日から二月二八日にかけて、『朝日新聞』夕刊紙上に芹沢銚介の挿絵つきで連載され、翌年、朝日新聞社から単行本化された。「忍者伝」とあるように、多彩な術を使う十三妹や白玉堂が剣を交える痛快な忍法小説である。連載直前の『朝日新聞』夕刊（一九六五・七・六）に掲げられた予告「次の夕刊小説」で、作者が「児女英雄伝」「三俠五義」「儒林外史」その他、利用できる古典のエキスは何でも好き勝手に使わせてもらって、自由に合成酒をつくり出したい」述べるように、本作は中国古典を典拠として創作された。創作当時の様子について、武田百合子による解説「思い出すこと」（『芹沢銚介全集』第四巻、一九八一、中央公論社）は、

「この仕事で難渋している夫の姿は憶えていない」と回想しており、愛好する中国文学の翻案を、作家自身楽しんで作業していたようだ。

本作をめぐっては、中国文学研究者によって同時代評が書かれている。たとえば、村松暎「武田泰淳著 十三妹」（『図書新聞』一九六六・七・二三）は、「原作の中国講釈流のおっとりトボケたユーモアを（中略）作者自身のものにしてしまっている」と述べ、駒田信二「武田泰淳『十三妹』（『朝日ジャーナル』一九六六・七・三三）も、中国古典の特徴である「話術の巧みさ」を近代小説に流用した「武田氏のこの手法」が「堂にいつている」と感心する。この評価は引き継がれ、典拠である白話小説を収録した立間祥介訳『中国古典文学大系』第四七巻（一九七一、平凡社）の松枝茂夫「解説」では、「清朝の長篇小説から人物や背景を借り来たって武田流に一ひねりも二ひねりも三ひねりもしたものと、わざわざ紙幅が割かれ

ることになった。膨大な分量を誇る清末の文芸、それを三篇無理なく接合した手腕は、非常に高く評価された。

先行論でも、中国文学との影響関係が考察されてきた。たとえば、小嶋知善「武田泰淳『十三妹』論」(『目白大学短期大学部研究紀要』二〇〇二・一二)は、「作家の自由な想像力を飛翔させて、読者を楽しませる工夫を十分に凝らした作品」であると述べるし、郭偉「武田泰淳と胡適」(『立命館言語文化研究』二〇〇五・二)は、「素材の選択から構成まで胡適の研究から少なからぬ影響、あるいは刺激を受けていた」と、泰淳が胡適の史観に馴染んでいたことを創作の動機として特定している。一方で、最近公にされた宮澤隆義「帝国と忍びたち」(『G・W・G』二〇一八・五)は、同時代に忍法ブームが起きていたことを踏まえ論を展開している。「性的差異の「アンフォルム」が、「忍者」たちの遭遇と闘争の中から集団的かつ実践的に生成してくる」とする宮澤論は、国家による支配に包摂されない新たな政治的領域として、忍者たちの空間を読んでいる。同時代言説との比較のなかから、批評性を析出したこの論は、研究史において特別な地位を占めている。

ただし、以上の論は基本的な作業といえる、典拠との比較を精緻に行っていない。初刊の「あとがき」でも、「児女英雄伝」「儒林外史」の二長篇は平凡社の「中国古典文学全集」に、わかりやすい

訳文でおさめられているから、この「十三妹」とそれらの訳文を読みあわせて下されば、私の(中略)悪戯を理解し、かつ許していただけと思う」とある。新聞掲載時の初出時であれば、熱心な読者は少ないかもしれないが、単行本を購入し再読するほどの読者であれば、典拠との差異に注意を払いつつ読むような行為も可能である。泰淳がそう考えたのなら、きちんと典拠比較を行うべきだ。また、本作と比較可能な資料は、まだ残されている。初刊「あとがき」で泰淳は、「最大のベストセラーとなった長篇『紅岩』、その映画化された「不屈の人人」には、あきららかに忍者的要素が活用されている」と、中国現代文学に言及している。この発言を踏まえると「十三妹」が、中国現代文学を意識して書かれた作品と考えることも可能である。

以上を踏まえ本稿では、白話小説がいかに換骨奪胎されているのかを詳らかにしたうえで、『紅岩』の主題と『十三妹』を比較することで、泰淳の中国現代文学に対する姿勢を析出したい。ではまず、典拠受容の大体を整理するところから論述をはじめめる。

二 〈ややこしい話〉の声なき女性

『十三妹』は三百年ほど昔の大清国、北京や杭州を舞台に繰り広げられる中国忍者伝である。張金鳳とともに安家の夫人である何玉

鳳は十三妹という別名を持つ忍者であり、安老爺に着せられた濡れ衣を払うために旅へ出た安公子をサポートする。前節で確認したように、本作は(1)『兒女英雄伝』、(2)『三俠五義』、(3)『儒林外史』の三作品を融通無碍に接合して書かれている。作者は(1)が文康(燕北間人)、(2)が石玉昆、(3)が呉敬梓だとされ、(1)と(2)は清朝道光年間(一八二二～一八五〇)、(3)は清朝雍正年間末期から乾隆年間初頭(一七四〇～一五〇年頃)の成立である。(1)は女侠であった十三妹が安公子を補佐し、最終的に安家に興入れする武俠小説、(2)は包公と呼ばれる裁判官が武俠たちを抱えつつ、襄王という勢力と対抗していく公案小説と武俠小説が接合されたもの、(3)は科挙制度に落ちこぼれた人々が偶然に出会いつつその挿話が語られる諷刺小説である^①。

本作は、大部分が典拠に基づいて形象されている。章ごとで腑分けすると、第一章〈首のはなし〉は『兒女英雄伝』、第二章〈ややこしい話〉は『三俠五義』『儒林外史』、第三章〈旅の話〉は『兒女英雄伝』『三俠五義』、第四章〈放浪の話〉は三作品すべて、第五章〈ねずみの話〉は『三俠五義』、第六章〈受験前の話〉は『三俠五義』『儒林外史』、第七章〈試験場の話〉は『儒林外史』に拠っており、第八章〈その後の話〉はそれらを踏まえた創作である。

また、典拠利用の方法については、全体を三つの部分に整理できる。一つめは〈首のはなし〉から〈放浪の話〉までで、この部分は

『兒女英雄伝』における公子の旅を基調としつつ、『三俠五義』『儒林外史』の印象的な挿話が盛り込まれ、物語は厚みを増している。二つめは〈ねずみの話〉から〈試験場の話〉までで、この部分は『兒女英雄伝』を基調とせず、『三俠五義』『儒林外史』の挿話に十三妹や公子を登場させることで物語が書き継がれる。三つめは〈その後の話〉で、それまで登場した人物が北京で一堂に会する。

人物ごとの典拠を示せば、十三妹(何玉鳳)、公子や張金鳳など安家の人々、金満少年は『兒女英雄伝』の登場人物であり、白玉堂(錦毛鼠)ら五義賊、包公と襄王、趙虎と展昭といった侠客、杭州の柳家の人々、〈ややこしい話〉で十三妹が語る人物は『三俠五義』の登場人物であり、馬老人、方博士、〈ややこしい話〉で老爺が語る人物は『儒林外史』の登場人物である。田中芳樹が中公文庫の『解説』(『十三妹』二〇〇二、中央公論新社)で、「源義経と坂本龍馬がひとつの作品中で共演するようなもの」と述べるように、典拠を接合した結果実現したのは、本来交わることのない人物たちの出会いである。武俠たちの中で一番強いのは誰なのか、本作を通じて読者は想像をたくましくすることができる。たとえば、十三妹や白玉堂が包公の宝物をめぐって戦う場面では、「白玉堂は、斜めざまに剣を刺し入れて、「垂花の勢い」を示した」、「彼女の方は「推窓挿月の勢い」で、対抗した」(〈ねずみの話〉一五)と、互いの必

殺剣を出し合う。この場面は、田中のような読者の期待に十分応えている。

また、泰淳は武侠の力を誇張して描いてもいる。(「ねずみの話」第一五回における戦いの場面の挿絵を見ると、十三妹たちは空に浮いており、また「一面に星を撒きちらした空。青黒い、その夜空のどこかで、流れ星が白熱の光の筋をひらめかせ、一呼吸もせぬうちに消え失せる」(「ねずみの話」一四)とある。彼らはフワリフワリと、戦闘を行っている。『兒女英雄伝』において最も派手な戦闘が行われるのは、能仁寺にて悪僧らを倒す章回(第六回)だが、ここで十三妹は、軽やかな動きを見せているものの、浮遊術まで身に着けてはいない。敵は、僧である設定も手伝って少林拳を練り出すのだが、十三妹は「連環進歩鴛鴦拐」という連続廻し蹴り、拳法で応対している。また白玉堂も、身のこなしはかなり軽やかであるものの、自分そっくりの皮ぶくろを出現させ、相手をだますなどの奇計を得意とするばかりで、本作に描かれているほどの術を身につけているとは考えられない。とすれば、本作においては、単に武侠たちを出合わせるだけでなく、そこで練り広げられる戦闘の方式も、より目新しいものへと工夫が凝らされることで、読者の興味に応えていると考えられる。

ただし、泰淳の工夫は以上に留まらない。第二章において、十三

妹が奇妙な話を開陳する場面が設けられるが、ここでは家の没落によって身売りされ、さらには売られた先から逃げ出したために、別の男性から辱めを受けた上で殺されてしまう、極めて悲惨な状況の女性をめぐる挿話が追加されているからだ。このような挿話の追加は、人物の出会いや戦闘の方法といった、読者の興味をひく工夫とはまた別種の、批評的読解を可能にする操作と推定できる。

竹内栄美子「抒情」的物語の否定(「批評精神のかたち」二〇〇五、EDI)が、「女性が大きな役割を果たすものは多く、泰淳の女性の描き方に定評があることは衆目の一致するところ」と分析するように、泰淳は女性形象にこだわりを持つ作家であり、「もの喰う女」(『玄想』一九四八・一〇)、「女の国籍」(『小説新潮』一九五一・一〇)、「秋風秋雨人を愁殺す」(『展望』一九六七・四〜九に断続的に連載)などの、女性が主人公に据えられた小説を多く発表した。「作家を救ふもの」(『女性線』一九四八・八)という評論では、「もしも女を甘くしかとりあつかへないなら、その作家は甘いのだし、表面的にしか対象をつかみ得ない」とも述べる。とすれば、主人公ほか多くの印象的な女性が登場する『十三妹』においても、人物形象にあたって工夫が凝らされていると考えるのが妥当だ。本作は長編が組み合わせられて創作されており、典拠とのすべての影響関

係を示すことは難しいが、ここからは白話小説が書き換えられた箇所のうち、特に女性形象に関連する部分を考察していく。

泥棒を見事、十三妹が撃退したことを受け、安家では宴会が開かれる。典拠中この場面はそもそもない。泥棒侵入の場面は「見女英雄伝」第三一回に扱えるものだが、撃退したあとは「鄧九公は残って安老爺と腰掛け、拳齋ビデーツァオルテラ・囊兒酒ナルを持ってこさせて、「きのうはたつぶり飲んだで、ぜひ一献ゆかにヤア！」^②（第三二回）とあるように、安家に逗留する十三妹の育ての親・鄧九公と安老爺との二人だけの会食となる。しかし本作では、全員参加しての「うちうちの集い」（「ややこしい話」四）が開催されるのだ。

ここでは、張金鳳が十三妹に何か話すよう促す。ふだんは多くを語らない十三妹だったが、せっかくの機会とある事件の話をする。開陳されたのは、幾件もの殺人事件の話題であった。この話はかなり入り組んでいるのだが、韓少年と老いた母に起きた災難がひとまの発端である。科挙合格を目指す韓は、極貧にあえぎつつ読書生活を送っていた。ボロ家に深夜、火のように赤い靴を履き、ネギのような緑色の上衣を来た男が入ってくる。翌日も男がやってきたため、韓が「お母さん」と叫ぶと、母親は諫めつつも息子をいたわる導かれるように床の下を調べると、宝物の入った箱を発見する。宝箱のなかは金や白い銀でいっぱいだった。自分のものにしてしようと

た韓は、バチが当たらないよう明神様に豚の頭を供えることにする。さっそく精肉店に行き購うが帰り道、警官に質問され袋を開けると、なかには血だらけの女の首が入っていた。

この出来事を端緒に、男性二人と女性一人の殺人がつぎつぎと明らかになっていく。この話は『三俠五義』第一〇、一一回より抜粋・接合されたものだ。典拠において包公は、部下を密偵として派遣して事件を解決していくが、この事件もそうしたもののひとつである。そして、重要なことはこの挿話に、過剰な性的欲望を抱いた男性による、女性に対する事件が含まれていることだ。

あの晩、彼の家へ錦娘とよぶ若い女が逃げこんできたのだそうで。かどわかされて女郎屋に売りとばされる婦女子の多いことは、皆さん御承知のとおり。金力と権力にまかせて、か弱い女を買い占め、妾にするイヤな大官が、これまた多い。錦娘も、ある大官に買いとられ、むりやり服従させられようとしたが、巧みに相手に酒をすすめ泥酔させ、やつと脱出して豚ころしの家へ駆けこんだわけ。／彼女をかくまってやった鄭が、よくよく眺めれば、心がとろけそうな色気のある女、その上、かんざしや衣類が高価な品なので、大官のかわりにおれ様がと手を出しましたが、女は泣きさわいで抵抗する^③。

（「ややこしい話」一一二）

報告されるのは、錦娘という女性への暴力である。清朝では大官と一般民衆のあいだに、想像を上回る格差が存している。一般民衆は生きるため、娘を身売りに出さざるを得ない。ただし彼女は抵抗を試み、大官から逃げる。しかし待ち受けていたのは、もうひとつの暴力、鄭による辱めであった。逃げ込んだはずの精肉店で彼女は辱められ、豚を切る包丁で首を落とされてしまったのである。

付言しておくべきは、錦娘に対する暴力が話のややこしさを解きほぐしたあと明らかになる、見えにくい次元で作動していることだろう。事件は、他の男性二人の死体の謎を解いた結果、ようやく発覚したものであった。包公という知性が存在しなければ、事件は気づかれないままであったし、この出来事は永久に明らかにならなかつたかもしれない。さらに、本作では同様の事件が、決して珍しい事象ではないことも読者に印象付けられている。「かどわかされて女郎屋に売りとばされる婦女子の多いことは、皆さん御承知のとおり」(「ややこしい話」 一一二)であり、また「犯されようが汚されようが、生きのびる方をえらんだ女性が多すぎるくらい多かつた」(「旅の話」 一)のである。錦娘は抵抗を試みたため殺されてしまったが、抵抗せず泣き寝入りした女性たちを含めると、弱い立場に對する暴力は、清朝において蔓延しているとみて間違いない。

ここでまでくれば、『三俠五義』が接合された意味は明らかであ

る。世相が乱れ、女性への暴力が見えにくい次元にまで日常化している作品世界を形成するためである。ただし、俠客が義憤を發揮するため、武俠小説において世相の乱れはある程度、物語の前提となつている。『見女英雄伝』でも第五回から第六回にかけて、悪僧たちが公子を襲う場面が設けられているように、すでに世の中は荒れている。本作はそうしたうえに、女性の抑圧をめぐる挿話をさらに接合し、さらなる乱れを書き込んでいるといえる。つまり泰淳は、過去の中国を舞台とした作品を書くにあたって、典拠である白話小説から抑圧された女性に関する挿話を多く接合することで、女性が生きにくい時期として物語内の時間を設定したのである。

ただし、このような作中時間の特徴は、単に女性が抑圧されている状況の告発を旨指したものではない。次節で確認するように、抑圧された女性たちが形作るある種の期待、その力学を問題とすることが、本作において探求されたと考えられるからだ。

三 十三妹にされた何玉鳳

錦娘の事件をはじめ、本作では『見女英雄伝』にはない、女性をめぐる挿話が他の典拠から多く接合されていることに気づく。(受験前の話)第六回で、公子の逗留する柳家での出来事もそうである。女中である繡紅は、墓を暴き財宝を得ようとする男によって、いと

も簡単に殺されてしまう。この挿話は、『三侠五義』第三五、三六回に拠って形象されたものである。また、旅行中の公子が美人局にかどわかされる挿話でも、自ら身を投げる女性が登場している。美人局の片棒を担いだことが露見した女性は、大河に身を投げる。

「お前、これからどうするつもりだい。お前の亭主は、お前がもどつてきたら河ん中に蹴落してやるとぬかしてるんだぜ」／船頭は、たくましい毛ずねを叩きながら、少女に問いかける。

／「ああッ。ああッ」／両手を拜むように胸の前であわせ、両眼をつりあげた哀れな少女は、呪うように祈るように、絹を裂くようなかん高い声で叫ぶ。／「ああッ、十三妹さま、お助け下さい。世界中の男なんか、みんな死んでしまえ！」／船室を走り出た彼女は、河へ身を投じた。(放浪の話) 一八)

九江に向かう船上の公子に、夜、蘇州美人が別の船を横付けにしてくる。彼女は泥棒なわけだが、世慣れぬ公子は騙されてしまう。これは、もともと『儒林外史』第五一回において糸を買いつける商人が美人局に遭う挿話であったが、本作はその被害者を商人ではなく公子に変更して接合している。また、被害者だけでなく、悪事が発覚した後の蘇州美人の行動も、本作にとり込まれるさいに変更が施されている。典拠においては、「女はみんなが見まもっているなから、服をまとい、立ち上がってコッソコッソと叩頭し、間抜け亭

主といっしょに恥ずかしさで顔をまっかにしながら船を下りて行つた」^④とあるように、『儒林外史』において美人局の夫婦は、また一緒になる。しかし、本作における夫は、「お前がもどつてきたら河ん中に蹴落してやる」(放浪の話) 一八) と言いつち、妻を見捨ててしまう。結果的に、彼女は一人で河に身投げすることとなるのだ。

問い詰めた結果、夫妻でその責任を背負うのではなく、妻にだけ責任が転嫁される改変によつて、彼女の悲惨さが印象づけられる。そして重要だと考えられるのが、「十三妹さま」の名が、妻の口から飛び出していることだ。北京の安家で生活していた十三妹と、蘇州で暮らすこの妻の接見は想定しづらい。にもかかわらず、口からその名は飛び出した。十三妹という名は現在、現在の何玉鳳その人の指し示しを超えた記号的価値を持ち始めている。「裸少女が口走る「十三妹」とは、もとより空想的、象徴的な女神の名前みたいなもの」(放浪の話) 一六) となっているのである。

十三妹^{シヤウメイ}という名前にはもともと、石^{イシ}という士族の三番目^{サンバンメ}の妹子^{メイコ}(いもうと、女の子) という、家系内の位置を示す程度の意味しかなかった^⑤。しかし、忍者として活躍していたころ、「十」が同音の「石」にとつて替わる。十三妹の語は、見たことはなくとも民衆に支持される、特別な名として通用しはじめたのである。彼女は現在、

安家に興入れしたが、にもかかわらず名の力は衰えておらず、この妻の口からもその名は発音された。「世界中の男なんか、みんな死んでしまえー」と叫ぶ女性は、自らの代理として男性社会に対峙する存在の登場を期待しており、十三妹はその期待の拠点として流通する記号なのだ。このような名の流通は、また杭州の場面でも確認できる。

「あの『烏盆』ですがね。(中略) アレは喜劇ではあるが、便器にされちまった男の悲劇でもありません。旧劇も、現代モノも、お好みに応じて見せるのが商売、出し物に選りごのみはしていませんが、どうも近ごろは男が女みたいに意くじがなくなってるから、多少、武ばったモノもやりたくなる」(中略)

「そこで私なんぞは、ここらで十三妹を芝居にしくんたら、気がサツパリすると思ってるんですよ」(中略)「私らにしてみりゃあ、芝居の見物衆が見たがつっている人物。それがつまり実在の人物。実物なんか生死のほどわからなくても、うわさの女、物語の女、それこそ普通の女よりも、もっとホンモノの女なんですからねえ」(受験前の話) 五〇六

公子は世慣れぬ読書人である。杭州に漂着した彼は、文海楼という書肆に身を寄せ、糊口を凌ぐ。文海楼の挿話は基本的に、『儒林外史』第一三回に拠っているが、劇団と公子が出会うという設定は

本作に独自である。一文無しとなった公子に劇団員が近づいてくる。公子を団員にしようとする団長は、飯をおごり演目について解説をはじめた。団長によれば、以前は「烏盆」が民衆に受けていた。これは『三俠五義』第五回に記される著名な公案で、陶器で出来たおまるに練り込まれた男の話である。おまるが裁判所に入るのを怖がりたり、白砂のういで陳情したりする喜劇だ。ただし、団長いわく「烏盆」は民衆の好みではなくなっている。世間が健康なときは、おまるを男を民衆は笑うことができた。しかし現在、世間そのものが健康でなく、男たちは意くじがない。弱った民衆は、自分自身のことのように感じるため、もはやおまるを笑えなくなっているのである。

そこで、「烏盆」に替わり上演が検討されるのが、十三妹の物語である。すでに靈隠寺での白玉堂との一戦が世間に聴こえており、その名は杭州でも知れていた。白玉堂と渡り合い、包公の宝を守った女侠。意くじを喪失した民衆は、代わりにすかっとならせてくれる強力な人物を求め、見物したがっている。動員をあてこむ劇団にとっては、実際にいるかどうか不明でも、民衆の期待に答えてくれる彼女こそが、「ホンモノの女」なのだ。「女みたいに」なった民衆は、弱りきった自分たちの代わりに悪に対峙する存在を求めており、十三妹はまさにそうした人々が待望する存在として見出されている。

ただし、民衆が期待を寄せる存在としての十三妹、その名の流通は彼女自身にとって好ましい事態ではないようだ。それは、十三妹をめぐって、世間の期待と彼女自身の想いが少しずれていることから読みとれる。「十三妹が、安家の第二夫人になってからも、ほんの時たまではあるが、ひとりだけ家内のにぎやかさからはなれ、食卓に向かったまま、別の世界に沈みこんだようにして、他人にはわからぬ思案にふけていることがある」(「旅の話」二)。思い返せば安家の宴席の場面でも、「もともと十三妹は、自分の過去を語りながらなかった。わが身の現在や未来についても、話すのを好まなかった」(「ややこしい話」四)と、彼女が自身について語るのを好まないことが印象づけられていた。本作の語り手は、彼女の心情に安易に介入せず、暗いものを抱えていることを示唆する。

人物の心理を叙述する際の慎重さは、本作において独自に確認される点である。白話小説について丸山浩明「明清小説話術形態小考」(「明清章回小説研究」二〇〇三、汲古書院)が、「児女英雄伝」では(中略)話の展開を細かく検証するが如く作者が自分で注を加えるように話を挿入する場合が非常に多い」と述べるように、白話小説の語り手は講談師をモデルとしており、即興かつ過剰な口ぶりによって作中人物の内面をよく説明できる特徴を備える。たとえば、「姑娘は天動性を好み静を好まぬ気性で、静かに仏に仕えよ

うという心は後天的なものですから、先天的な激しい気性をどうして押さえることができましょう」(第二四回)というように、『十三妹』でも、語り手が顔を出し内容が注釈されることはよくあり、それは同時代評で秀逸とされた点でもあった。しかし、十三妹の心理に限って言えば、講談的な語りは意図的に失調させられている。

ではなぜ本作中、十三妹の心理が十分に語り得ない対象として形象されているのだろうか。それは、周囲の人の考えが、彼女の心理を捉えることの困難さを表現するためと考えられる。つぎの引用は、白玉堂と十三妹が物語終盤で交わしたセリフである。

「でも、私をねらってどうなるというの。(中略)女の私に、何ができるといふの」／と言う、十三妹の声にはかぎりない悲しみがこもっていた。／「あんたは、女じゃないよ。十三妹なんだ」(中略)「私は、平凡な女です」／「そうなりたがっているだけさ。だが、お前さんは、どうしたって十三妹でなくちゃいられないのさ」／偶然に、私が男の首を切りとったからと言って、私を特別の女、女以外の女と考えないでちょうだい」

(「その後の話」一四)

白玉堂は、人々の期待を背負った十三妹である事実を、彼女に突きつける。しかし、それを彼女は平凡な女というアイデンティティによって拒否する。物語冒頭では、「今では、得意の弾弓(いしゆ

み)や剣を手にとることもなく「現在のところ、夫は彼女を愛し、彼女も夫を愛しているのだから、それでさしつかえはない」(首のはなし) 二三)とあり、彼女が支配階級の貞淑な妻となり、自身でもそれを受け入れていることが示されていた。とすると白玉堂への返答として述べられる「女」の語も、十三妹の現在の状況と捉えて差し支えない。彼女は自身のことを、忍者としての十三妹ではなく、貞淑で平凡な妻として同定しつつ、過去の名を棄てた安家の第二夫人、何玉鳳として生きてゆきたいと考えているのである。

しかし、その不可能を白玉堂は告げる。抑圧された女性たちや、意くじのなくなった民衆から十三妹の名は、篤い支持を獲得しつつある。彼女の平凡でありたいという願いは、流通する名を通じてかき消されてしまうのだ。本作では、共同体において人々の期待が集積することで、女性主体が強制的に成型されてしまう力学が構造化されている。主体はふつう肯定的な意味を持った語として理解されることが多い。しかし、その主体の類型が、周囲から押し付けられた場合、人間の自由の心情は切り詰められてしまうことになる。家庭にありたい何玉鳳を、勇敢な十三妹としてみなす周囲の期待は、彼女にとってよいものとしては働かない。

四 『紅岩』における抗日女性表象

ここまで、本作が人々の期待を契機として、女性主体を創出する力学を含んでいることを論証してきた。泰淳は、典拠から女性に関する挿話の接合を多く行い、独自の物語を成型した。こうした操作の結果、書かれた本作のプロットは、ちょうど主要典拠『兒女英雄伝』のプロットを、転倒させたものとして捉えることができる。白話小説の研究者である王徳威「空虚な正義」(神谷まり子ほか訳『抑圧されたモダニティ』二〇一七、東方書店)は、『兒女英雄伝』を分析する際、章回にして第二六回、第一夫人である張金鳳が十三妹を説き伏せ、安家に嫁ぐことを納得させた場面に注目している。この第二六回の二人の女性たちの議論を描いた部分こそ、作者の社会における想像力が頂点を迎えた瞬間だと考えられる。能仁寺の場面は暴力の要素を多く含むが、この回も同様に様々な暴力、すなわち生活様式の衝突、概念による拘束、そしてイデオロギーによる解放という暴力が、描かれている。何玉鳳はそれまで疑ったことのない価値観を再検討する必要性に迫られ、強い葛藤に襲われる。(中略)彼女の転向は、(中略)彼女を生まれ変わらせるための、啓示のドラマだったのである。

『兒女英雄伝』において「自分の縁談だけは、どんなに、英雄だ、

豪傑だ、といつても、天命のままに、母親の懐にだきとられ、母親のするなりになるほかないんです^⑦」という張金鳳のことは十三妹は受け入れる。この受け入れを、王徳威はイデオロギーによる暴力として意味づける。イデオロギーとは、結婚による両親や先祖への孝養であり、自由な生活をしていた彼女は善意に満ちた張金鳳や安家の人々によって巧妙に、貞淑な妻として主体化されてしまう。王徳威は『兒女英雄伝』を、自由であった人間が貞淑な妻として、強制的に主体化される物語として理解するのである。

この見解を踏まえると、『十三妹』のプロットは典拠のそれをちよほど転倒したものとして理解できる。本作は、家庭の妻としてでありたい人物が、期待の力学により民衆を代表する存在として主体化される物語なのである。典拠において彼女が十三妹から何玉鳳になるのだとすれば、本作において彼女は何玉鳳から十三妹になる。泰淳は『兒女英雄伝』を、女性の主体化の物語であることを読みとつたうえで、それを反転させるべく『三俠五義』や『儒林外史』における抑圧された女性の挿話を接合し、小説のプロットを成型したのである。さらに、部分的に十三妹をめぐる語りを失調させることで、女性を主体化する力学が、期待に満ちたものであったとしても、彼女の立場を強制的に表象し、声を篡奪してしまうことを問題化した。『兒女英雄伝』という典拠に改変を施すことで、もとのプロットと

反対の論理が構造化された作品、それが本作なのである。

郭偉「武田泰淳の肉筆稿『城隍廟附近』その他と、裏面の『兒女英雄伝』について」(『早稲田文学』二〇一八・三)が、「上海時代の草稿『城隍廟附近』の裏面に『兒女英雄伝』からの抄録がある」と述べるように、泰淳は早くから十三妹の物語に親しんでいた。一九四八年一〇月の時点で、文芸誌『八雲』に「女賊の哲学」という物語を発表してもいる。これを踏まえ、時を経た一九六五年に十三妹への関心が再び高まったのは、同時代に忍法ブームが起きており、武侠が日本における忍者と近親性のある形象として再発見されたことがあるだろう。ただ、初刊「あとがき」の言及を踏まえると、中国現代小説が日本において広まっていたことも、本作の内容に影響を与えた事象であることは間違いない。

羅広斌と楊益言によって共同執筆された『紅岩』は、中華人民共和國成立直前の時期における、国民党根拠地重慶にあった收容施設での、共産党員たちによる獄中闘争が描かれた作品である。一九六一年の中国青年出版社版など複数の単行本が発行され、当時としては建国後最大のベストセラーとなった。「かいせつ」(共同映画株式会社宣伝課編『不屈の人びと』《紅岩》一九六六、東明宣伝企画)によれば、「中国では、すでに五百万部を売りつくし、新劇、伝統劇、オペラにもな」り、「日本でもこの小説『紅岩』が、六三年、

新日本出版社から三好一訳で出版されるや、たちどころに数十万部を売りあげた。映画化された作品は「不屈の人びと」〔原題：「烈火中永生」〕として国内でも公開され、それも相まって日本でもベストセラー化した。

この作品では、一部の裏切り者を除いて、獄中闘争にあたる登場人物に、共産黨員としての理想的な像が割り当てられている。ただし、そのような形象が男女の区別なしになされた結果、家庭人としてありたい女性が理想的革命家として主体化してしまうという機制を有している。成岡と江雪琴という人物同士の会話を検討してみよう。幹部である成岡は、工作における女性の位置について述べている。「ぼくはある人たちは恋愛し、結婚すると、すぐにくだらぬ小さな『家庭』のなかに落ちこんでしまうのを見ました。ちっぽけな憐れむべき『暖かさ』と『幸福』が簡単に革命と理想にとつてかわってしまうのです……」。彼は家庭生活の優先が、革命を阻害してしまうことを打ち明ける。対して、江雪琴は家庭の問題が革命の下位にないことを主張する。「あなたの話もすべて正しいわけではありませんよ」「あたしには可愛い子どもがいるわ。でも彼はあたしの仕事の邪魔をしたりしないことよ！」^⑧（第三章）との言は、革命と家庭を両立することの重要性を説くものであった。

しかし、この意見は彼女自身によって裏切られる。共産党勢力の

拡大に伴い、国民党は捕虜の虐殺政策を推し進めた。中米合作所のうち、入れば二度と戻れない白公館行が決まるが、彼女は「もし共産主義の理想のために犠牲が必要な時は、わたしたちは、誰でもが、顔色一つ変えず、呼吸も乱さずにこうしなければならぬのだし、またこうすることができのです」（二五章）と述べ、進んで犠牲となる。行動は同志から「われわれは江雪琴の言葉を忘れてはならない。嵐の前でも、恐れることなく、前進をつづける。試練のまえでも、顔色を変えず、呼吸も乱さない！」^⑨（二六章）と力強く肯定される。成岡との対話を踏まえると、彼女は家庭に対する愛情が革命にも劣らない重要性を持つと考えていたはずだ。しかし、結局子を犠牲とする選択を、彼女自身が選びとり、また他の同志による肯定を通じて、その選択が正しいことが印象づけられる。小説は、家庭人でありたい人物を抗日女性として主体化し、家庭が革命より優先度の低い問題であることを、巧妙に正当化するである。

『紅岩』は抗日女性の理想像を提示するが、その影で家庭を二次的な問題とってしまう小説である。これを踏まえると、『十三妹』と『紅岩』の共通点と相違点は以下のように素描できる。『十三妹』とは、『紅岩』とは、女性が不平等な社会に対峙していく存在として描き出される点で共通している。しかし、女性を共産黨員として主体化するにあたって、『紅岩』が反省のない作品であるのに対し、『十

三妹」は女性の主体化が、たとえ積極的な価値を有したものであっても、彼女自身の声を篡奪してしまう可能性に意識的である点で相違している。作家は、中国現代文学の陥穽を見通したうえで、自らの小説における登場人物形象に、その陥穽を批評できる要素を盛り込みつつ小説を制作した。泰淳は一九六〇年代において、共産党の公式主義的な文学に批判的な姿勢をとっていたと考えられるだろう。伝統的なキャラクターは一九六〇年代において、社会的な不均衡を告げ知らせる存在として再生させられたのである。

注

- ① 三作品の書誌の事項に関しては、常石茂「解説」（奥野信太郎ほか訳『中国古典文学全集』第二九卷、一九六〇、平凡社）、鳥居久靖「解説」（同訳『中国古典文学大系』第四八卷、一九七〇、平凡社）、稲田孝「解説」（同訳『中国古典文学全集』第三三卷、一九六〇、平凡社）を参照した。
- ② 原文「鄧九公這裏便合安老爺坐下，又要了壹壺齊齋兒酒，說：『昨日喝多了，必得投一投。』」なお、泰淳がどの刊本を参照したのか明らかでないため、多く出回る亜東図書館本を使用して比較を行った。書誌は以下の通り。文庫『兒女英雄伝』（一九二〇、亜東図書館）、石玉崑『三俠五義』（一九二五、亜東図書館）、呉敬梓『儒林外史』（一九二二改版本、亜東図書館）。
- ③ 原文「他說：『名叫錦娘。只因身遭拐騙売人煙花，我是良家女子不肯依從。後來有蔣太守之子倚仗豪勢多許金帛，要買我為妾；我便假意慫慂

通酒獻媚，將太守之子灌得大醉，得便脫逃出來。」小人見他美貌，又是滿頭珠翠，不覺邪心頓起。誰知女子讓叫不從」（第二一回）。邦訳「彼女は「名を錦娘と言います。騙されて女郎屋に売られるような目に遭うところでしたが、良家の娘である私はそれを承知しませんでした。そのあと蔣太守の息子が権勢を笠に着て多くのお金で私を妾にしようとした。私は慫慂なふりをして、酒を注いで媚を売り、どうにか注いだ酒に太守の息子を酔わせ、逃げ出してきました」と言いました。私めは彼女の美貌と、また頭に装飾品がいっぱい付いているのを見ると、不覚にもよこしまな心を起こしてしまいました。女が叫び従わなかったことを誰が知るでしょう」。なお、『十三妹』で彼女を妾にしたのは大官だとされるが、典拠では大官の息子による行いとなっている。

- ④ 原文「衆人見着那婦人穿了衣服，起來又磕了兩個頭，同烏龜滿面羞愧下船去了」。
- ⑤ 「兒女英雄伝」第八回、公子が「姑娘、あなたの呼び名は、九十の『十』の字なんですか？ それとも、金石の『石』の字なんですか？」（姑娘、你這称呼是九十的「十」字？還是金石的「石」字？）と尋ねると、十三妹は「わたしも良家の娘なんです」（我也是個好人家的兒女）と眼を紅くする。
- ⑥ 原文「只是他天生的那好動不好靜的性兒，仗着後天這片心怎生扭得過先天的性兒去」。
- ⑦ 原文「自己的婚姻了，甚麼叫英雄呀，豪傑呀，只有聽天由命，一跤跌在娘懷裏，由她去怎麼好，怎麼好」。
- ⑧ 原文「我見一些人，戀愛，結婚，很快就掉進庸俗窄小的家庭，中去了，一点可憐的，溫暖，和幸福，輕易地代替了革命和理想……」、「你的話也不全對，「我有個可愛的孩子，他併沒有妨碍我的工作呀！」。引用にあたって本稿では、初期の単行本である羅広斌ほか『紅岩』

(一九六一、中国青年出版社)を参照した。

- ⑨ 原文「如果需要為共產主義的理想而犧牲，我們每一個人，都應該，也可以做到——顏不變色，心不跳」，「我們都記住江姐的話，在風險面前，決不退縮，一往直前；在考驗面前，顏不變色，心不跳！」。

〔付記〕 泰淳の文章の引用は初出に拠った。漢字は新字体に改め、ルビや

参考資料の副題は適宜省略した。引用文中の(中略)、/(改行)、(一)(注記)は藤原による。典拠邦訳に関しては奥野信太郎ほか訳『中国古典文学全集』第二九卷(一九六〇、平凡社)、奥野信太郎ほか訳『中国古典文学全集』第三〇卷(一九六〇、平凡社)、鳥居久靖訳『中国古典文学大系』第四八卷(一九七〇、平凡社)、稲田孝訳『中国古典文学全集』第三三卷(一九六〇、平凡社)を参照したが、三冊目のみ抄訳のため、引用箇所が省略されている場合は稿者訳で補った。『紅岩』の邦訳に関しては、羅広斌・楊益言、三好一他の中国語文献の邦訳は、論者による。なお本稿は、第二七回占領開拓期文化研究会(二〇一八年一月二日、於立命館大学)での口頭発表を経て作成した。各席上でご指導頂いた方々に心より感謝申し上げます。